

大会 2009 J.LEAGUE 仙台、C大阪が3節を残してJ2リーグ戦の3位以内を確定

2009シーズンも大詰めを迎え、J1・J2のリーグ戦とも、優勝争い、昇降格をめぐる争いが節ごとに白熱の度を増してきた。J2では11月8日に行われた第48節で、ベガルタ仙台、セレッソ大阪が、3節を残してJ1への昇格条件の一つとなる3位以内を確定した。

この時点で2位の仙台は、アウェイの水戸ホーリーホック戦に4-0の快勝を収めた。同じ時間帯に行われた試合で同3位のヴァンフォーレ甲府が敗れ、同4位の湘南ベルマーレが引き分けたため、直接対決を残していたこの両チームが同時に仙台を勝点上で上回る可能性がなくなった。また、勝てば自力での3位以内が決まるC大阪は、ホームでザスパ草津に5-0と大勝し、勝点を101へ伸ばして2位以上が

確定。両クラブはJ1クラブとしての資格要件が認められると、正式に昇格が決定する。

「目標はあくまでも優勝」(仙台の手倉森誠監督)、「(C大阪として)チーム初のタイトルに向けて、まだ気が抜けない」(C大阪のレヴィークルピ監督)という優勝争いも注目される。

J1は、10月24日の第30節で大分トリニータ、11月8日の第31節でジェフユナイテッド千葉の16位以下が決まった。今季からJ1・J2入れ替え戦がなくなり、J1の16~18位クラブとJ2の1~3位クラブが自動入れ替えとなる。第31節終了時点での優勝争いは、初のタイトル獲得を狙う首位の川崎フロンターレを、前人未到の3連覇を目指す2位の鹿島アントラーズが勝点1差で追うという展開となった。

鬼武 健二Jリーグチェアマンのコメント

【仙台】

2003年のJ2降格以来、6シーズンの間、仙台のファン・サポーターの皆さんが待ち望んだ瞬間がようやく訪れたことで、その喜びもひとしおのことと思います。手倉森監督の下、スピード感あふれるサッカーは観客を魅了し、さらに警告・退場の少ないクリーンなプレーぶりは、称賛に値するものでした。J2での苦しい経験を糧に、来季はJ1でも上位を狙う活躍を期待しています。

【C大阪】

多彩なタレントをそろえた圧倒的な攻撃力をベースにした華麗なパスサッカーは、ゲームを重ねるごとに進化を重ね、特にシーズン終盤の安定力はJ1での活躍を予感させるものでした。3年間、この日を待ち続けたファン・サポーターの気持ちを忘れずに、そしてJ1での飛躍を胸に、残りの3試合も全力でセレッソらしいプレーを期待します。



ホームの大阪長居スタジアムで今季の3位以内を確定したC大阪



アウェイゲームに駆けつけたファン・サポーターと喜びを分かち合う仙台の選手たち

大会 AFC CHAMPIONS LEAGUE 中立地の国立競技場で開催の決勝。浦項がアジアのクラブ王者に

アジアのクラブチャンピオンを決めるAFCチャンピオンズリーグ(ACL)決勝が11月7日に行われ、浦項スティーラーズ(韓国)がアルイテハド(サウジアラビア)に2-1と競り勝ち、この大会の前身であるアジアクラブ選手権に2連覇

を飾った1998年以来、11年ぶり3度目の優勝を飾った。グループリーグ出場チーム数の拡大、優勝賞金の増額など、大幅にリニューアルされた今年のACLは、決勝もホーム&アウェイの2回戦制から、中立地での1回戦制に変更とな

り、国立競技場がその舞台となった。

また、決勝で出場のコ機会はなかったが、浦項の一員として優勝の感激を味わったのが、川崎フロンターレやベガルタ仙台などに所属したDF岡山一成。「アジアで優勝するという夢がなかった。次は世界一になるという夢を目指してやっていきたい」と、AFC(アジアサッカー連盟)の代表として出場権を獲得したTOYOTA プレゼンツFIFAクラブワールドカップ UAE2009(12月9~19日)への抱負を述べた。

4チームが出場した日本勢は、名古屋グランパスが準決勝へ進んだが、アルイテハドに敗れて決勝進出はならなかった。だが、ACL初出場での成果に、ストイコビッチ監督は「ベスト4という結果を出した。クラブとしても新しい経験ができた」と収穫を挙げた。

AFCチャンピオンズリーグ	準々決勝	準決勝	決勝
パフタコール(ウズベキスタン)	①1-1	①6-2 ②2-1	1-2
アルイテハド(サウジアラビア)	②0-4		
川崎フロンターレ(日本)	①2-1	①2-0 ②2-1	
名古屋グランパス(日本)	②1-3		
ブニョドコル(ウズベキスタン)	①3-1	①2-0 ②2-1	1-2
浦項スティーラーズ(韓国)	②1-4(延長)		
ウム・サラル(カタール)	①3-2	①2-0 ②2-1	
FCソウル(韓国)	②1-1		



優勝の感激に浸る浦項の岡山(前列右から2人目の4番)

地域密着 第10回全国ホームタウンサミット IN 新潟が開催される

「CHANGE! スポーツがくれた宝物」をテーマに、「第10回全国ホームタウンサミット IN 新潟」(主催:スポーツで幸せなまちづくり実行委員会)が11月14、15日の両日、新潟市内で開かれ、Jクラブや全国の自治体関係者、ボランティアなど約300人が参加して盛大に行われた。

湘南ベルマーレの眞壁潔 代表取締役が「地域密着とクラブ経営優先順位」をテーマに講演し、2000年に湘南の取締役に就任してから

の苦労話を披露。当時、反町康治監督(現 湘南)の率いるアルビレックス新潟に手痛い黒星を喫した話を盛り込むなど、会場を沸かせた。

続いて篠田昭 新潟市長のコーディネートにより、眞壁氏と新潟の田村貢 代表取締役社長が、Jリーグ百年構想のスローガン「スポーツで、もっと、幸せな国へ。」などのテーマを中心に意見交換を行った。篠田市長はサッカースクールへの支援や街中のバナー掲出などの協力について語り、田村社長もクラブが市民

の力によって十二分に支えられている現状を報告した。

この後、「スポーツとまちづくり」「クラブを支える組織づくり」「ボランティア活動の魅力づくり」というテーマで三つの分科会が行われ、それぞれ活発な議論が行われた。

翌日には、財団法人 日本サッカー協会の綾部美知枝理事が自らの体験を踏まえ、「『サッカー』をキーワードにしたまちづくりからサッカー王国の継承へ」と題する発表を行った。そして新潟の小山直久 取締役事業本部長が、アルビレックス新潟の成功の足跡を発表して幕を閉じた。

今回のホームタウンサミットでは、多くのスタッフが会場の設営からガイドなど、労を惜しまぬ協力を行った。

ホームタウンサミットは、スポーツによる地域振興などを市民レベルで考えていくことを目的として、1999年に第1回が開かれた。Jクラブのホームタウンを盛り上げようと活動している団体、個人など、幅広い参加者が集う場となっている。



ホームタウンサミットも今回が10回目の開催となった



講演する湘南の眞壁 代表取締役

育成 2009 Jユースサンスタートニックカップ 第17回 Jリーグユース選手権大会



Jクラブのトップチームへの登竜門ともいえる「2009 Jユースサンスタートニックカップ

第17回 Jリーグユース選手権大会」が、いよいよ決勝トーナメントに入る。11月23日に終了した予選リーグを勝ち抜いた16チームに、日本

クラブユースサッカー連盟代表の4チーム(三菱養和サッカークラブユース、横河武蔵野フットボールクラブユース、Honda FC、アミーゴス鹿児島U-18)を加えた20チームがトーナメント方式で争う。

この大会はユース世代の選手育成と真剣勝負の機会を提供することを目的に開催されており、日本サッカー協会の第2種(高校生年代)に登録している選手が中心となる。Jリー

グでも、この大会を経験した10代の選手の活躍が目立つなど、その重要性は回を重ねるごとに高まっており、若い選手たちのひたむきなプレーが大いに注目されている。決勝は12月27日(日)に大阪長居スタジアムにて開催。決勝トーナメントの出場チーム、組み合わせ、日程などについては、Jリーグ公式ホームページの当該コーナー(<http://www.j-league.or.jp/youth/>)を参照。

決勝トーナメント日程

- 1 回戦: 12月6日(日) / NACK5スタジアム大宮、西が丘サッカー場
- 2 回戦: 12月12日(土)または13日(日) / 出場クラブホームスタジアムなど
- 準々決勝: 12月20日(日) / ベストアメニティスタジアム、長居第2陸上競技場
- 準決勝: 12月23日(水・祝) / 大阪長居スタジアム
- 決勝: 12月27日(日) / 大阪長居スタジアム

過去の決勝の成績

第1回	1994年 4月 3日	横浜M 0-1	V川崎	第9回	2001年 12月 29日	京都 3-1	F東京
第2回	1994年 12月 24日	V川崎 2-3	G大阪 (延長Vゴール)	第10回	2002年 12月 28日	広島 0-5	G大阪
第3回	1995年 12月 24日	広島 3-1	V川崎	第11回	2003年 12月 28日	広島 6-4	市原
第4回	1996年 12月 28日	V川崎 2-1	G大阪	第12回	2004年 12月 26日	鹿島 0-0	広島 (延長, PK3-1)
第5回	1997年 12月 27日	清水 3-0	広島	第13回	2005年 12月 25日	神戸 1-4	清水
第6回	1998年 12月 27日	市原 2-3	鹿島	第14回	2006年 12月 24日	広島 2-0	F東京
第7回	1999年 12月 26日	神戸 2-0	横浜FM	第15回	2007年 12月 24日	柏 1-2	F東京
第8回	2000年 12月 29日	清水 0-1	G大阪	第16回	2008年 12月 27日	C大阪 2-4	G大阪

功労選手賞について

Jリーグは11月17日に開催した理事会において、元Jリーグ選手の小村徳男氏に対し、功労選手賞として表彰することを決定した。表彰式は、12月7日(月)に開催される2009 Jリーグアウォーズにおいて実施される。受賞者は2009年9月、10月の理事会で承認された名波浩氏、福西崇史氏、加藤望氏、森岡隆三氏、森島寛晃氏と合わせ、計6名となる。

小村 徳男(おむらのりお)

1969年9月6日生(満40歳) 出生地: 島根県 ポジション: DF
(所属クラブ) 1992~98年 日産F.C.横浜マリノス/横浜マリノス(J)、99~2001年 横浜F・マリノス(J1)、02~03年 ベガルタ仙台(J2)、04~06年8月 サンフレッチェ広島(J1)、06年8月~07年 横浜FC(J2/J1)、08年 ガイナーレ鳥取(JFL)

多彩なJクラブの取り組み

Jリーグはどのような活動を行っているのか、Jリーグの理念がどのようなものであるかというのは、Jクラブが実際に取り組んでいる活動を通して知ることができる。おそらく、地域貢献活動がほかのJクラブの地域に伝えられる機会は少ないと思うので、その内容をこうしたレポートによって数多くの人々に知ってもらうことは非常に意義がある。また、それをメディアの目を見て、広くホームタウンや一般読者の方々に伝えることに意味がある。

J1・J2リーグの36クラブのうち、1993年からの10チームは17年、今年入会したばかりの3チームは1年に満たないという歴史の違いがあり、それぞれの活動の段階がよく表れているのも興味深い。活動の内容にもよるが、ゼロから始めて地域に密着しようとするクラブから、地域がすでにクラブの価値を認め、その先のアクションを起こしているクラブまで多様だ。

また、ひと口にホームタウンといっても、県全体を盛り上げようとしているところから、おひざ元の町を起点に活動を広げようというクラブまでさまざま。これは、どちらがいい、悪いということではなく、読者の皆さんが36クラブを見比べ、「こういうやり方もあるんだな」と参考にしたり、興味をもってもらえたらいいと思う。

地域の特徴を生かした活動も目についた。京都サンガF.C.なら商店街や学生に焦点を当てた活動。川崎フロンターレが取り組むスポーツと音楽のコラボレーションは、川崎市のテーマでもある。

「原点回帰」を目指す動きもあった。ヴァンフォーレ甲府は、財政難によって消滅の危機に瀕したところから、クラブと地域が手を携えて立ち直ったし、ジュビロ磐田も初心に帰ってさらに地域に溶け込もうとしている。東京ヴェルディはクラブの伝統を見直し、育成組織から人間教育を含めて選手を育てようとしている。ガンバ大阪も「地元へ愛されるクラブ」を目指して

©KYOTO P.S.

©川崎フロンターレ



©ジュビロ磐田

©ヴァンフォーレ甲府

る。いずれも、経営危機や成績不振、入場者の減少などの厳しい経験によって、地域密着の重要性、必要性をあらためて認識したのだろう。クラブを挙げての活動もあり、「選手とスタッフの距離が縮まり、全員参加によりクラブ内の結束がより強まった」(ジェフユナイテッド千葉)という効果を生んだ例もある。

意識変化のパロメーター

現在、Jリーグの理念を実践しようという活動は、クラブ側からのアプローチが主体だ。この連載においても、Jリーグ創設時には未熟だった地域密着という概念を、クラブが地域に示そうとして、年を重ねるごとに定着してきたことが分かる。だが、本来は地域がクラブとその意識を共有できたときに「ホーム」という概念が名実ともに出来上がり、「Jリーグ百年構想」の実現が加速する。クラブが地域に密着しようとする活動には、さまざまな段階があるが、いずれにしても、「地域のクラブ」という意識を、クラブ側も

地域側も持つことが大切となる。

地域のクラブという意識では、クラブのアプローチに対する地域の意識変化が言葉にも表われる。

例えば、サンフレッチェ広島のリポートには「わたらの街のサンフレッチェ」というフレーズが出てきた。そういう言葉が出てくるようになって、その気持ちを活動で表わすようになれば、本当の「Jリーグ百年構想」へ近づいていくことができる。一方通行ではなく、一緒に手を携えた形での歩みだ。

大阪の人なら「ガンバは…」から進んで「うちのチームは…」と言うようになる変化が重要な指標だ。一般の人々に話すときに「うちのチームが…」という言葉が聞かれるようになってうれしいことだ。また、3人称でも「アルビレックス(新潟)」ではなく「アルビ」、「コンサドーレ(札幌)」ではなく「コンサ」とニックネーム化しているのも、その第一歩だと思う。こうした何気なく表れる言葉も、地域のクラブとして定着しているかを測る物差しといえるだろう。

スポーツでつくる幸せな国「Jリーグ百年構想」へのアプローチ 索引

[vol.146]	大宮アルディージャ「育成を通じた地域のコミュニケーション」 川崎フロンターレ「プロモーション展開力の強さの秘密」
[vol.147]	FC東京「大都市クラブを支える小さな努力の積み重ね」 ヴァンフォーレ甲府「あのときの『声』を忘れず 地域とのつながりを大切に」
[vol.148]	大分トリニータ「地域密着が“命綱” 一步一步、確実に前へ」 セレッソ大阪「サッカーのイメージアップから始まった普及活動」
[vol.149]	コンサドーレ札幌「拡大する地域貢献活動。『公共財』としてのクラブ」 愛媛FC「小さな積み重ねの広がり。クラブの存在が着実に浸透」
[vol.150]	柏レイソル「J2降格を機にクラブコンセプトを一新。支えてくれる人々を意識」 アビスパ福岡「地域の広い受け皿と環境整備。今後10年への土台は整った」

[vol.151]	名古屋グランパス「軌道に乗り始めた新しい路線。地道な活動継続への熱意」 湘南ベルマーレ「クラブ存続の危機をきっかけに総合型スポーツクラブの実現へ」
[vol.152]	京都サンガF.C.「ゼロから築き上げた信頼関係。地域密着と人材育成を両輪に」 ベガルタ仙台「健康づくりと地域の活性化。宮城の元気がクラブの元気に」
[vol.153]	浦和レッズ「21世紀の日本の新たなスポーツのあり方を目指して」 サガン鳥栖「地道な取り組みがブランド力向上、支援の広がりへ」
[vol.154]	ジェフユナイテッド千葉「ホームタウン広域化で地域密着に注力。クラブ内の結束も強まる」 サンフレッチェ広島「対面のお付き合いを軸に、地域と共に戦うクラブへ」
[vol.155]	アルビレックス新潟「新たな段階に入った成長。地域社会貢献も次のステップへ」 徳島ヴォルティス「スポーツを通じた健康増進。地域に根差したクラブならではの取り組み」

Jリーグニュースではvol.146 (2008年3月28日発行) からvol.165 (2009年10月30日発行) まで、Jクラブの地域密着への活動をレポートする「スポーツでつくる幸せな国『Jリーグ百年構想』へのアプローチ」の連載を行い、クラブが地域の一員になろうとする多彩な取り組みを紹介した。各号2クラブずつ、合計18回にわたるシリーズの終了にあたって、地域の事情などに詳しいJリーグ理事の傍士銃太氏に総括をお願いした。



©東京ヴェルディ

©サンフレッチェ広島



©ガンバ大阪

©清水エスパルス

また、レポートには「コミュニケーション」という言葉も何度か出てくるが、その意識を共有できる場、ファン・サポーターが共通の時間を持つことができる場であるスタジアムが、どこまで真の「ホームスタジアム」といえる存在になり得るかが重要である。地域貢献活動も、数多くの人々がホームスタジアムに足を運ぶようになってこそ、実りあるものとなる。その求心力となるのが、「聖地」と呼べるような存在となったホームスタジアムではないかと思う。そして、クラブも地域もホームスタジアムを意識することが、地域貢献活動の評価につながる。地域貢献活動の成果を数字で測ることは難しいが、入場者数は一つのバロメーターといえるだろう。

清水エスパルスは2005シーズンから入場者が増え続けているが、クラブが静岡市と協力して実施しているタウンミーティングの一つの成果ではないだろうか。クラブと地域が同じテーブルについて一緒に議論し、意識を共有して連帯した結果、ホームスタジアムのあるべき姿が出来上がりがつつあると思う。「連携」がさらに進んだもの

が「連帯」。連帯保証人というのは債務者と同じ立場だが、運命共同体ともいえるべき立場に高めることが重要となる。もちろん、活動を行ってすぐに成果が上がるものではないだけに、地道に活動を継続することが不可欠だ。

ブランド力を高めるために

ファジアーノ岡山も、前に述べた求心力の中心にスタジアムを考え、岡山県陸上競技場 桃太郎スタジアムを核にしようと考えている。スタジアムから同心円的に活動を広めていこうという考えだ。川崎もスタジアムのある川崎市中原区を基点に活動を開始していった。G大阪もホームタウンの吹田市に周辺3市を加えた地域を重点エリアとして、活動を行っている。スタジアムにオフィスを置いたり、クラブショップを併設したり、近くに練習場があるなど、クラブが施設を集約する段階に入ってきたことも、スタジアムが求心力の中心になりつつある例だろう。

人々がスタジアムへ足を運ぶきっかけはさま

ざまだが、行ってみれば仲間がいて、感動や喜び、時には悲しみも共有してサッカーを好きになり、コミュニケーションの場となる。街中の広場みたいな感覚で、そこに行けば楽しいことが待っている。その目印となるシンボリックなものがスタジアムであり、地域の自分たちのクラブである。それはJ1だろうが、J2だろうが変わりはない。クラブの地域貢献活動は、スタジアムに足を運ばせるきっかけの一つとなり、Jリーグがそのような機会や場をつくったというのは非常に意義深いことだ。

Jクラブが行っている地域貢献活動は、もっと多くの人々に知ってもらいたいと思う。それには、こうした活動の対象となった学校や商店街、施設の側からも発信してもらうことが大切だろう。例えば、「Jクラブにこんなことをしてもらいました」「Jクラブと一緒にこんなことをしました」などなど。自らアピールする以上に、コミュニケーションの相手側から発信してもらうことによって、効果が増すのではないかな。

もちろん、こうした活動はそれぞれの地域のメディアで取り上げられているが、なかなか全国レベルで触れる機会は少ない。36クラブの集合体としてJリーグを考えた場合、せっかくの素晴らしい活動をもっと広くアピールしない手はない。それは、Jリーグのブランド力を高めることにもつながらずだ。



傍士銃太氏によるコラム「百年構想のある風景」が、Jリーグ公式ホームページ (<http://www.j-league.or.jp>) にて連載中です。

[vol.158] モンテディオ山形「献身的に支える県民とクラブの交流。家族的な一体感が最大の強み」
水戸ホーリーホック「『できることから徹底的に』。スタートラインに立った地域との共生」

[vol.159] 横浜 F・マリノス「選手の自主性と熱意が縮めたファン・サポーターとの距離」
東京ヴェルディ「育成組織も地域貢献活動に参加。人間教育こそが育成の本質」

[vol.160] ジュビロ磐田「『原点回帰』でブランド力再生。選手全員で地域に溶け込みを図る」
ザスパ草津「『広がる教育現場との連携。子供たちにスポーツの楽しさを』

[vol.161] ヴィッセル神戸「ホームタウンで多彩なアクション。街とともに歩み、豊かな社会を」
横浜FC「『少しずつ輝きを増す地道な活動。『小さな接点を大事に!』」

[vol.162] 鹿島アントラーズ「都市型チームにない強みを生かし ホームタウンと密接な関係を構築」
ロアッソ熊本「熊本色を前面に県民の誇りへ。『夢』と『熱意』で地道に根気強く」

[vol.163] ガンバ大阪「『市民に近い距離で接する活動。きずなを深め、愛されるクラブに』」
FC岐阜「『言葉は『子供たちに夢を』。総合地域型スポーツクラブとしての役割』

[vol.164] 清水エスパルス「クラブと市が連携して地域交流を応援。きめ細かいタウンミーティング」
栃木SC「『地域との関係を強化する土台づくり。県内サッカー界の将来も見据えて』

[vol.165] カターレ富山「ファン・サポーター、サッカー人口のすそ野拡大に取り組む」
ファジアーノ岡山「『ひたむきな姿勢を忘れずに クラブ一丸で『岡山のシンボル』へ』

Jリーグ公式ホームページ (<http://www.j-league.or.jp>) では、「Jリーグニュース」のバックナンバーを掲載しており、この連載を閲覧することができます。

Report

レポート

新たなステージへの第一歩

「ケースデンキスタジアム水戸」でオープニングマッチ



2009年11月8日、水戸ホーリーホックに新たな歴史が記された。J2リーグ戦第48節が行われたこの日、チームはベガルタ仙台を迎え、新装の「ケースデンキスタジアム水戸」でオープニングマッチを戦ったのである。これまでは水戸市の北にある那珂市の笠松運動公園陸上競技場でホームゲームを開催することが多かったが、ホームタウンである水戸市にJ2リーグ基準を満たすスタジアムが完成したのだ。

同スタジアムは1987年に水戸市立競技場として竣工し、今年8月に株式会社ケースホールディングスがネーミングライツを取得して改称。スタジアム自体は、水戸市市制施行120周年記念施設として、2007年7月から全面改修工事が始まっていた。

オープニングマッチは、J1への昇格条件の一つとなる3位以内がかかる仙台が対戦相手となったこともあり、水戸のホームゲームとしては今季最高となる8,463人の入場者が詰めかけた。

水戸の沼田邦郎 代表取締役社長もクラブの公式ホームページのブログで「これからが真の水戸ホーリーホックの始まりと位置づ

け」ているが、それは単にホームタウンにできた新しいスタジアムでホームゲームを戦えるようになっただけではない。同スタジアムの存在が、クラブの成長に大きな可能性をもたらすことが予想されるからだ。

クラブはオープニングマッチの準備段階で、幾多の苦労を重ねたことによって、貴重な経験も積んだ。数多くの来場者への対応はもちろん、大型映像装置も初めての経験なら、オープニングイベントも盛りだくさん。クラブ側はあらゆる準備を6人のスタッフと3人のインターンが中心となつてこなし、「いつもより2ランクも3ランクも上の対応が必要だった」（藤村昇司 常務取締役）。

重要な課題の一つだった交通アクセスについては、夏ごろから輸送計画の策定に当たり、水戸市や地元警察、警備会社などと折衝を続けた。初めての経験ということで簡単には事が運ばず、11月に入っても予断を許さぬ状況だったという。しかし、試合当日は「警察も50人ぐらいを派遣していただき、信号操作や交通誘導をしっかりとやってくれた。渋滞もほとんどなく、車の流れもスムーズ。足りなくなるかもしれないと思った駐車場にも、不足は出なかった」（藤村 常務）。

通常は20人程度というメディアも、176人が集まる予想以上の盛況。なかなか先読みのできない状況の中、手探りともいえる準備事項もあったが、クラブのス

タッフは周囲の協力を得てオープニングにこぎつけた。11月8日が近づくにつれ、クラブのオフィスには水戸市の担当者をはじめ、関係者が夜遅くまで詰め、一つのものをつくり上げる作業を続けた。

クラブの広報担当主任である館智穂子さんは「最後の数日間、いろいろと苦労はあったが、これほど地域の人々と密接な関係を築いたのは初めて。クラブがどのように動き、ホームゲームを運営するかを、間近で見ることができたのも有意義」と語る。試合当日の運営についても各方面から「何人ぐらい連れて行けばいいか」といった手伝いの申し入れが寄せられるなど、クラブは「人のつながり」という貴重な財産を手に入れた。

藤村常務も「11月8日を経験して、試合の運営や集客に手を携えてくれる仲間をクラブの外に増やすことが大切だと分かった。クラブが中心になって水戸市や商工会議所、メディアなど、いろいろな立場の人にかかわってもらい、みんなのプロジェクトにしたい。昨今の地方財政が厳しい中、市が巨費を投じて改修してくれたのだから、そこでいい試合をすることが本当に大事だし、そう思う人を増やしたい」と語る。

ケースデンキスタジアム水戸は、個席、見やすさ、コンコースの広さ、トイレの数など、入場者にとって非常に快適な施設だ。ホームタウンにある素晴らしいスタジアムで試合ができることは「Jクラブの本来あるべき姿だし、クラブにとってうれしいこと」と藤村常務。「これをステップにして、次のステージへジャンプしたい」と、スタジアムを活用したクラブの発展への期待を述べた。



オープニングのあいさつを述べる加藤浩一 水戸市長



華やかなオープニングセレモニー。収容数1万2000人のスタジアムは、水戸市のスポーツ文化の新しいシンボルだ



「Jリーグニュース」は100%再生紙を使用しています。